

焼け跡のきのこ

大久保 泰和

焼け跡に発生するきのこがあるとは聞いていましたが、縁がなければ見ることはできません。

最近では生活の場から火鉢や火を入れたこたつ等は姿を消し、周辺環境に配慮して焚き火はできなくなりました。火を使うことが少なくなったために、焼け跡きのこに遭遇する機会はめったにありません。

ところが、昨年は2か所の雑木林火災跡で焼け跡キノコを観察する機会を得ました。

〔焼け跡その1〕 ヤケアトツムタケ

2014 年 4 月 15 日に発生した雑木林火災跡で、約 1 年後の昨年 4 月 11 日に発見。火災の跡が生々しく、焼損したコナラやアカマツなどはすでに伐採・切断して集積されていましたが、地上は黒い炭化材（以下「炭」と書きます）の破碎片に被われています。その炭をかき分けるようにヤケアトツムタケが小群生していました（図 1～6）。

このきのこは傘の粘性著しく、光沢のある傘表面に炭の小片が付着していて、乾いた炭のかげらと濡れた傘の表皮が対照的です。柄の基部には炭の細片がびっしりと付着していますが、地上生のようにです。また焼け跡から 100m 程度離れた場所に、焼損材が移動・集積されていて、その周辺の炭だらけの地上にもヤケアトツムタケが相当数発生していました。火災の跡を好むというより、炭のある場所に発生するといった方が適切なのかもしれません。



図 1 ヤケアトツムタケ 発生状態



図 2 ヤケアトツムタケ 採集品



図 3 ヤケアトツムタケ 傘表皮
厚さ 0.5mm ほどの粘性被に被われる

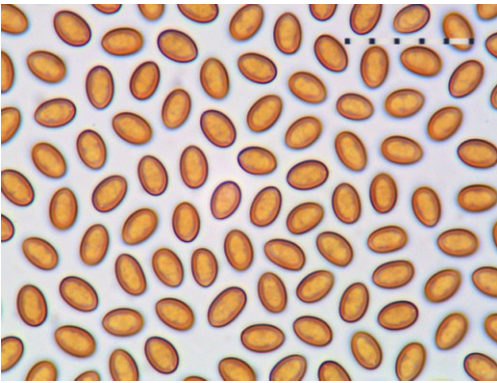


図4 ヤケアトツムタケ 胞子
6-7.5(-8) x 4-5 μ m 厚壁

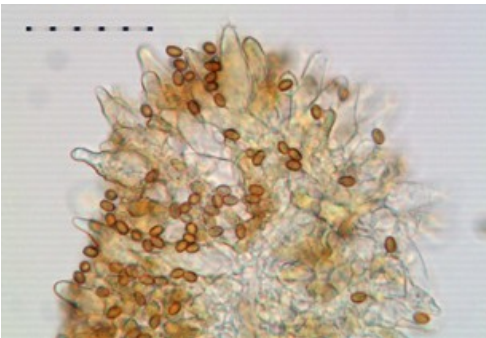


図5 ヤケアトツムタケ 縁シスチジア

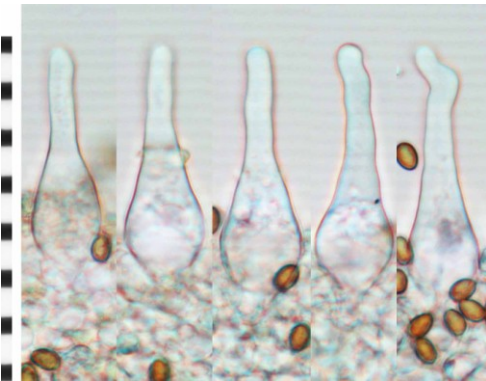


図6 ヤケアトツムタケ 側シスチジア

ヤケアトツムタケのほか、タマキクラゲの小菌が、焼け焦げた材に発生していました(図7)。焼ける前は生木であったので、火災後胞子が飛来して発芽したか、菌糸が伸びたものなのか、いずれにしてもきのこのしたたかな側面が見えてきます。炭化した材の表

面は、雨後の保水性が高いため、きのこの発生には有利に働くのかもしれませんが。

この火災跡の地上には、アカメガシワが占有するように生えていましたが、冬にはすべてなくなってしまいました。



図7 焼損材に発生したタマキクラゲ

〔焼け跡その2〕 ヤケノシメジ

2015 年 5 月 26 日に火災が発生、1,550 m² 焼損した別の火災跡で、約半年後の 12 月 19 日に、3 種類のきのこが発生しているのを発見しました。焼損した樹木は切断・集積されており、炭化した材の表面に点々と発生している白いスエヒロタケが目立ちました(図8)。また、キカイガラタケと思われるきのこが数個体発生していました(図9)。これらのきのこも、先のタマキクラゲと同様に、どのようにして発生に至ったのかを知りたいところです。



図8 スエヒロタケ



図9 キカイガラタケ

地上にはヤケノシメジが散生しているところがありました(図10~14)。汚黒褐色のさえない小菌で焼け跡に発生するにふさわしい風情です。キシメジ科のきのこであるため、顕微鏡で観察しても際立った特徴はありません。焼け跡に発生していなかったら同定は難しいと思われます。ここでも、ヤケアトツムタケが1個体だけ発生していました。

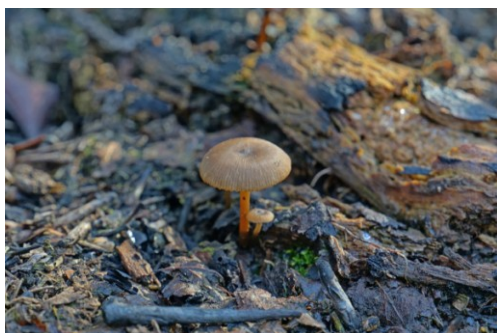
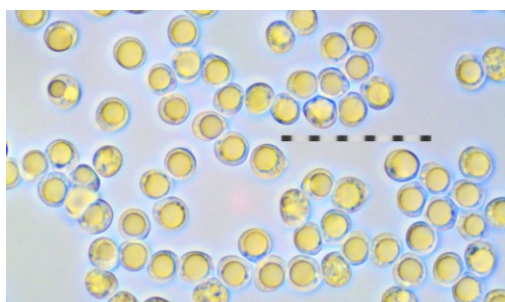


図10 ヤケノシメジ発生状態



図11 ヤケノシメジ 採集品

図12 ヤケノシメジ ひだ
長じると灰褐色となる図13 ヤケノシメジ 孢子 孢子紋白色
4.5-5.5(-6) x 4-5.5 μm

焼け跡きのことは、火で滅菌・リセットされた場所に、いち早く侵入してさっさと商売を済ませ、次の侵入者が来ると早々と退散、隠忍して機会を待つのことであると、吹春先生の本『きのこの下には死体が眠る！？』技術評論社(2009年)に書いてあります。ただ、今回分かったことは、ヤケアトツムタケなどのような焼け跡専門の菌以外にも、焼け跡を探しているきのこがいるらしいということです。